



特別コレクションについて

図書館長(人文学部教授)

仲地 弘善

大学図書館に「特別コレクション」コーナーを設定して他の図書館では得られない貴重な資料を保管しておくことは、大学図書館の使命の一つであると同時に、知のセンターとしての図書館本来の役割でもある。本学院図書館にも、「石田穰一鉄道図書コレクション」、「『宗教改革者全集—カルヴァン著作集』全59巻コレクション」、及び「マンガ・コレクション」など、図書館を利用する学生や教職員、あるいは外部からの訪問客などの関心を惹きつける特別コレクションがある。それに加えて、2010年度に設置予定の「仲里朝章文庫」が立ち上がれば、一段と大学図書館としての役割が強まってくるであろう。

「特別コレクション」と言えば、筆者が20年ほど前に文科省の短期在外研修で米国の大学図書館や公立図書館を調査研究のために訪問した時のことが思い出される。特に、テキサス大学オースティン校のハリー・ランサム人文学研究センター図書館やスタンフォード大学のグリーン図書館での「特別コレクション」所蔵の資料を閲覧した際には、大学図書館の果たしているコレクションの重要性に改めて気付かされたものだ。

テキサス大学オースティン校のハリー・ランサム人文学研究センター図書館には『エデンの東』(*East of Eden*, 1950)の「手稿」と「タイプ原稿」、及び『怒りのぶどう』(*The Grapes of Wrath*, 1939)執筆時に書かれた日誌の「タイプ原稿」(『怒りのぶどう』とその「日誌」の「手稿」はヴァージニア大学図書館の特別コレクション課に所蔵)が所蔵されていて、スタインベック研究者にとっては、その図書館はメッカ的存在の一つになっている。筆者は『エデンの東』の「手稿」を2~3日間にわたって閲覧する機会を持ったのだが、今でもその「手稿」の手触りや字体の映像は鮮明に残っている。その「手稿」は、7~8回に分割してB4紙サイズのトレイに入れられて閲覧する仕組みになっていた。当然のことながらコピーをとるのは禁じられていたが、受付の司書に見本として使用したいので2~3ページコピーをさせてくれと申し出たところ、快く承諾してくれた。そのコピーを見るたびに、今でもあのときのことが思い出されるのである。

スタンフォード大学はスタインベックが大学生として在学していたという関係もあって、その「特別コレクション」は類を見ない規模と質の高さを誇っている。特に、『キャナリー・ロー』(*Cannery Row*, 1945)の「手稿」、「タイプ原稿」、「校正刷り」、「新刊見本」や「第一版」など完全な資料のコレクションとなっている。前もって調査研究のための資料閲覧を申し出ておいて、必要なコレクション資料を拝見させてもらったのであるが、「特別コレクション」のために大学図書館が幅広い資料収集努力をしており、またそのコレクション資料の保管と閲覧に並々ならぬ気配りをしている実態が、閲覧体験を通して、垣間見ることができた。

さて、本年度に設置予定の「仲里朝章文庫」は、本学院の初代理事長兼学長であった仲里朝章先生の貴重資料(日記70冊・ノート80冊・原稿用紙「手稿」ダンボール1箱)が親族からご寄贈されたのを機会に、本学院図書館2階の「キリスト教コーナー」の一角に設置する予定になっている。

この「仲里朝章文庫」の設置は、本学の建学の精神を体現している仲里朝章先生の「開学の辞」やノートに書き記した想いなどを、学生や教職員に思い起こさせる場となるであろう。また今後、本学の歴史を語り継ぎ記録に残していく上で、貴重な原資料になっていくであろう。そして、何よりもクリスチャンとして、かつ教育者としての仲里朝章研究に役立てるための幅広い関連資料収集の出発点になるであろう。

沖縄における平和教育

人文学部英語コミュニケーション学科 准教授

新垣 誠

「さあ、感想を作文にまとめなさい。」

今年もまたこれかと舌打ちし、渋々鉛筆を取り出しては、今テレビのなかに見た光景を思い出す。爆風のなか、腹の破れた死体が転がり落ち、恐怖に怯える少女が全身を振るわせながらこっちを見ている。この世の物とは思えない惨劇が、モノクロの画面を何度も覆い尽くす。

「慰霊の日」は、学校が休みになるという以外、幼少期の私にとって特別な意味を持たなかった。六月二十三日が近づくと「平和学習」と称して、よく沖縄戦の実録フィルムを授業で見せられ、感想を書かされたものだ。小学生の頃、初めて観たその残酷な映像は、トラウマになるほど衝撃的で、しばらくは先生を含め、まわりの大人が怖く思えた。しかし、毎年同じフィルムを観ているうちに、その悲劇にも慣れ、まるでアニメの再放送でも観ているような気持ちになった。そのうち米兵や老人など、登場人物の顔まで覚えてしまい、頭の中で次のシーンまで予想する余裕までできてしまった。

それにしても梅雨の時期、ただでさえ気持ちが塞ぎ込みがちなのに、沖縄戦の映像は更に気分を重く暗くさせる。感想を書けと言われても、どんよりと淀んだ精神状態からは、「怖かった」、「戦争は残酷だと思った」、「二度と戦争をしてはいけないと思った」、「平和が一番だと思った」など、ありきたりで予定調和的な感想しかでてこない。それを毎年繰り返すうちに、「どうだ、戦争は恐ろしいだろ」と脅されている気持ちになり、慰霊の日の平和学習は、精神的に苦痛なものとなっていった。

さすがに高校生くらいになってくると、感受性の豊かさも手伝って、社会の矛盾が鼻につくようになってくる。学校の平和学習は、「戦争は悪」と説きながら、軍事基地との懇ろな関係を苦し紛れに「ベターな選択」と開き直る沖縄の大人たちの現実については、なぜか沈黙。理想論では飯は喰えぬという沖縄社会の日和見主義や、沖縄戦を美化する軍国主義に向き合おうともせずに、過去の戦争の悲惨さのみを語る授業の時間が、学生にとって茶番に見えても仕方がない。

「自らの歴史を知らない人間は、動物と変わりない」と、マルコムXが言ったように、コミュニティーの集団的記憶を語り伝えることは重要である。また、自らの歴史を自らが語ることは、政治に関わることでもある。チベット自治区ではその権利が剥奪されているし、歴史教科書問題を考えると、沖縄にとっても深刻な問題なのだ。しかし、多くの平和学習が、色褪せカビ臭くなる原因は、その過去の大切な記憶が、今日、目の前で繰り広げられている現実と切り離されているからではないか。沖縄戦の記憶は、博物館のショーケースに陳列される古びた展示物ではないはずだ。

私たちはしばしば過去の出来事を想起する。人間の精神は、防衛機能として辛い記憶を中和もしくは消していく。ただいたずらに辛い過去を思い出し、くり返し悲壮感に浸ろうとする人は、あまりいないはずだ。しかし、時として辛い過去を思い出さずにはいられない時がある。それは、その過去を思い出させる現実が、いま目の前に存在する時である。

沖縄戦のモノクロフィルムが、鮮やかなカラーとなって甦るような今日を、私たちは生きている。教育三法や歴史教科書問題、平和憲法改悪や有事法制成立の動き、これら一連の政治的「改革」から、私たちは軍靴の響きを聞き取らなければならない。国体強化のため、私たち国民の行く先には、再び戦場が準備されているかもしれない。また、朝鮮戦争から今日のイラク侵攻に至るまで、米軍基地を通し私たちは世界の戦争と寄り添うように生きてきた。あの沖縄戦の惨事が、今現在も世界では続いているのだ。沖縄戦を今の時代に再文脈化し、その教訓を今の生活に甦らせてはじめて、平和の学習は、時代と共に生き抜くための学びとなるはずだ。

残虐な沖縄の過去と、絶望的な世界の現実を知ったところで、その学びに意味はあるだろうか。人間不信と危機的未來観を若い世代に抱かせて、それで放置するのはあまりにも残酷である。やはり学びは変化を生まなければ意味がない。持続可能な生活を目指し、世界の貧困を考えて物を買ひ、軍事に加担しない日々の選択が、実際に平和を創り上げているのだという、喜ばしい実感につながるような行動の回路を持たなければならない。平和は不断の営みにおいてのみ保証される。

インドの思想家クリシュナムルティは、現在世界が暴力に満ちあふれているのは、教育者の失敗だ、と言い切った。一向に止まぬ暴力の現実が証言するように、世界には、そして沖縄にも、真の平和の学びは未だ存在しないのかもしれない。そんな暗黒の時代においても、沖縄戦の体験は、時を越えて私たちに多くのことを語りかけ続けている。私たちはその悲惨な過去を変えることはできない。しかし、その教訓を活かして現在や未来を変えることはできるはずだ。そのための学びは常に、今にある。



私の「研究」と「理科教育支援」

総合教育系 教授
内間 清晴

「研究」

希土類元素は原子番号57番のランタン (La) から71番のルテチウム (Lu) までのランタノイドと21番のスカンジウム (Sc) と39番のイットリウム (Y) を加えた計17種類の元素のことです。これらの元素は化学的性質が互いによく似ています。希土類は磁性を担う原子の深いところに位置する4f電子を持ち、これらのf電子同士およびf電子と伝導電子の相互作用により、様々な興味深い物性が織りなされます。

私の研究は、希土類(希土類金属)や遷移金属(鉄族元素等)の希土類遷移金属間化合物の物性を、実験的手法による物性基礎研究を行っています。希土類遷移金属間化合物は、永久磁石材料、水素吸蔵材料及び磁気冷却材料と有望視され、これまで数多くの研究がなされ、一部実用化されています。特に、近年は、環境問題が社会問題としてクローズアップされ、クリーンエネルギーの開発が危急の課題とされていることから、水素吸蔵材料及び磁気冷却材料として注目されている物質です。実験分野は、電気的、磁氣的及び熱的分野であり、試料を作成し、液体ヘリウム温度領域1.5Kから1300Kまでの温度範囲で、17Tまでの強磁場(超伝導マグネットによる)および3GPa(大気圧の3万倍、1平方センチあたり30トンの重さ)までの高圧力を加えて、多重極限環境を作り出して物性の測定を行っています。現在、私が主として取り組んでいる希土類遷移金属間化合物は、重希土類Tb(テビウム)と遷移金属Co(コバルト)化合物TbCo₂のTbを軽希土類Nd(ネオジウム)で置換したNd_{1-x}Tb_xCo₂です。研究は、琉球大学の仲間隆男教授(磁性体研究室)と共同研究を行っています。本年度は、琉球大学理学部・磁性体研究室の大先輩にあたる上床義也先生(東京大学物性研究所准教授)の研究室において、8GPaという高圧力下での電気抵抗測定を行わせていただきました。また、これまでにキリスト教院特別研究費や宇流麻研究費等の経済的サポートを頂き、今年度の7月には、これまでの研究成果をドイツで開催された国際磁気学会でも発表することができました。多くの実験を通して得られたデータを解析していく中で、目では直接見ることはできませんが、隠れていた自然現象の真理を知る事ができる事に、研究の魅力と楽しさ

それらの理由として、これまでの学校教育が、こども達が自ら学ぶように育てられていない、考え抜く学びより、テスト準備や受験競争のための教育が中心であったと私は考えています。自分で学習する、考える、そして分かったと感動する。そのことが生きる力になっていく。私は、十数年、高校現場で理科を教えることができましたが、私自身の教育のあり方がどのようなであったか反省させられる点が多々ありました。私の経験から、生徒達は、高校入学前に、すでに理科嫌いになっており、実験・実習を行なっても、興味・関心や楽しいと感じる生徒の割合が少なくなってきたことを実感し、すごく懸念を持っていました。

理科教育で大切なことは、感受性豊かな小学生の頃から、自然現象に対しての、①正しい知識、②ありのままに自然現象を見ることができる。③自分で学習する力、④自分で考える力、⑤そして、分かった！と感動する力、つまり、心を躍動させる学習・知の営みを育てることだと痛感しています。私は2007年度に、本学院短期大学に赴任しましたが、短大教員としての責務として、教育、研究だけではなく、地域社会への貢献もあります。それで、小学生という初等教育の段階から、理科教育を通して心を躍動させて学習することができる(知の営み)児童を育てることのできるような支援を行ないたいと考え、2009年4月から西原町教育委員会と沖縄キリスト教院との地域連携事業の1つとして理科教育支援がスタートさせました。理科教育支援授業を開始する前年度には、小学校の先生方と数回の会議を持ち、PISAの調査結果から分かること、理科教育支援が必要かどうか、必要などのような支援が必要か、そして具体的に私たちがどのような支援を行えばよいか等について話し合いを持ちました。そして、小学校現場の先生方、教育委員会の先生方、私たち支援する者たちが、お互いが納得した上で2009年4月から理科教育支援事業がスタートしました。5月から7月までは、西原町立の4つの小学校の理科専科の先生方、教育委員会の指導主事、理科教育支援を行なう先生方、本学院企画推進課の方々からなる運営委員会を月1回のペースで行い、夏休みにおける小学校の先生方を対象とした研修会内容と2学期以降に行なう小学校の理科授業支援について話し合いました。

があります。私の研究分野は物性基礎研究であり、地道で時間のかかる研究ではありますが、楽しみ、心を躍動させながら研究を継続していきたいと考えています。

「理科教育支援」

OECD（経済協力開発機構）は、「質の高い教育は、国家や国民が持ちうる最大の財産であり、国家の生産力、経済力、生活力の鍵を握る要素である」という考えから教育をOECDの中心に据え、教育に関する国際調査「PISA」(OECD生徒の学習達成度調査)を15歳の生徒(高校1年生)を対象に行っています。2006年に実施されたPISAの調査結果から、科学リテラシーについては、国際的には見て上位にはあるが、①「科学的証拠を用いること」に比べ、「科学的な疑問を認識すること」や「現象を科学的に説明すること」に課題があること、②論述式問題での無答率が高いこと、③科学への興味・関心や楽しさを感じる生徒の割合が低いことなどの課題が明らかになりました。

夏休みの研修は、小学校の先生方の理科に関する力量を高める事を目標に、第1回(7月29日):矢ヶ崎克馬先生(沖縄キリスト教短期大学客員教授・琉球大学名誉教授)による「水の形とゆくえ」、第2回(8月5日):私と高江洲義尚先生(沖縄キリスト教短期大学非常勤講師)による「電気の働きと磁石」、第3回(8月12日)加藤祐三先生(琉球大学名誉教授)による「大地のつくりと変化」、計3回の研修会を行いました。2学期からは私たち理科教育支援者が、小学校現場に出向き、小学校の先生方が効果的な実験指導が行なえるように理科授業支援も行なっています。また、理科授業支援以外に、直接、児童を対象とした科学教室を行っています。今年スタートしたばかりの事業ですが、今年度の経験を活かし、2年目、3年目とより充実させ、児童1人1人が、問題意識をもち、自ら考え、判断し、行動できる力、自ら心を躍動させて学習する力をつけていけることに結びつくようなサポートに努めていきたいと考えています。



学生からのメッセージ

- 英語科2年次 池原ゆうゆ
- 保育科2年次 兼城しおり
- 英語コミュニケーション学科3年次 阿嘉夏希
- 大学院異文化コミュニケーション学研究科
異文化コミュニケーション学専攻 鎌田 史
- 英語コミュニケーション学科2年次 仲田光輝

図書館という場所

英語科2年次 池原ゆうゆ

私にとって図書館は、とてもお得で便利で感謝せざるを得ない場所です。多種多様な多くの本を何冊でも何度読んでもパソコンを使っても無料です。それは当たり前なのですが、学びの場所が無料で提供されている私たち日本人は、幸せな環境にいると思います。図書館に一步足を踏み入れると静寂の雰囲気や溶け込むように勉強に専念しやすくなるのは私だけでないと思います。

また、図書館は書店にはない本が多くあり、様々な辞典や事典があるので学生にとって有意義に利用できると思います。私も学生ですから、日々利用させて頂いています。

沖縄キリスト教学院図書館では、英語科のために、英語の絵本や新聞、参考書などが多くあり、とても感謝しています。

大学生になって、英語の絵本を手にとったのは初めてでしたので、良い体験をさせてもらっていますし、学問に勤め励むことができています。

幼い頃は、字の少ない絵本ばかり読んでいたのですが、最近では専門的な本を好んで目を通して読むようになりました。幼児や障害者、高齢者にも大いに活用出来る図書館は、なくてはならない場所なのだと思います。きっと私は老いてお婆ちゃんになっても、新聞などを読みに図書館へ行くと思います。どんな人にも感謝でいっぱいになる場所です。

もし、「図書館」という人がいたら、「ありがとう」をたくさん言いたいです。

人との出会いと本との出逢い

保育科2年次 兼城しおり

私は、幼少期に母親から熱心に絵本を読んでもらった記憶はないのだが、いつ頃から本を読みだしたのかと記憶をたどると、中学生の頃に流行った赤川次郎の「三毛猫ホームズ」のシリーズを熱心に読んでいたことを思い出した。社会人になると、友人の影響で椎名誠や野田知佑のカヌーの本や旅行記を多く読んだ。「この場所に行ってみよう」と強く思うようになり、本から得られた状況にイメージを膨らませ、実際に四国の四万十川や仁淀川を訪れた時の感動はひとしおであった。

社会に出ると多くの人に出会い、その時々に出会った人からの影響が本にまで及び、今までにないジャンルの本に巡り合う機会が増えた。在学中は幼児教育の本を読む機会が多かったのだが、本当に気に入る本との出逢いは、人との出会いと似ているような気がする。世の中にある多種多様の本の中から、一生のうちにとどれだけ気に入った本に出逢えるか、楽しみである。

留学先の図書館について

英語コミュニケーション学科3年次 阿嘉夏希

私はアメリカにあるポートランド・コミュニティ・カレッジという大学に10ヶ月間留学していた。その学校の図書館に私は毎日のように通い詰め、課題やテスト勉強をしていた。その図書館ではテスト前になると学生にはありがたいサービスが行われた。そのサービスとは、無料のコーヒーとティーが用意され学生は勉強しながらそれを飲むことができるのである。

また通常は閉館している日曜日もテスト前には開館され、勉強したい学生がいつでも来れるようになっていた。活字離れ、勉強離れが叫ばれている日本教育。それを学生のせいばかりするのではなく、学生が頑張れる環境をつくることも必要だと私は考える。

ありがとう、図書館

大学院異文化コミュニケーション学研究科

異文化コミュニケーション学専攻 鎌田 史

仲地弘善先生の秘書や大学院生としての二年間を含めると沖縄キリスト教学院との関わりは、はや6年が経過しようとしています。この6年間は私の20代後半にあたり(ちなみに昨年6月に30歳になりました)、この期間の私の知的好奇心の素地は、本学の図書館でつくられたと言っても過言ではありません。とりわけ、私の財力では到底手の出ないOEDや平凡社の大百科事典、あるいはブリタニカといった参考図書や学術雑誌の類にはたいへんお世話になりました。

図書館の利用に際しては、貸し出しの冊数制限を大量にオーバーしても利用させていただき、また、帯出禁止の参考書類の貸し出しも許可していただきました。ほんとに、図書館に対しては「感謝」の気持ちしか浮かびません。

図書館奨学生を終えて

英語コミュニケーション学科2年次 仲田光輝

私は沖縄キリスト教学院大学に入学してから二年間、図書館奨学生として奉仕活動をしてきました。

もともと、人並みにしか本を読まない私にとって、図書館という場は敷居の高い場所という先入観がありました。ですが、図書館で奉仕活動をするようになってから私の先入観は見事に打ち砕かれ、自然と利用する時間が増えていきました。テレビ欄しか見なかった新聞も、豊富にある新聞社の中から自分の好きそうな記事が載っている新聞を捜すまでになりました。

しかし、悲しい事に我が図書館は利用人数が少ないという点があります。中には二年生にもかかわらず、本の借り方がわからず今日初めて借りた。という人も少なからずいました。やはり私と同じように、皆さんの意識の中にも図書館は敷居の高い場所だ、という先入観があるのではないのでしょうか。

人から図書館へ行け、本を読めと言われる前に自分から一歩踏み出す勇気が図書館を、本をより一層面白くしてくれるはずですよ。もしこの記事を読んで図書館を利用する学生が増えたなら幸いです。



図書委員から一言

- 英語科教授 作田 真由子
- 保育科准教授 赤嶺 優子
- 人文学部英語コミュニケーション学科准教授 浜川 仁



夢と文学

英語科教授
作田真由子

皆、よく知っていることだが、夢の中ではどんな状況もあり得る。自分自身も、年齢や性が違ったりするし、場所も時代も現実と違ったりする。昔から私は夢に魅せられてきた。夢の不思議な感覚が一日中、気分を支配することもよくあったし、夢の中で得た洞察が、目覚めた後も通用するような気がしたこともよくあった。

考えてみるとこれらは文学作品と共通の特徴だ。夢と違うところは、小説ははっきりと文字化されていて、何度も読み返す事が出来るし、自分にとって必要なものをじっくり取捨選択できることだ。

また、自分とは違う人物が作り上げた世界なので、異質で新鮮であるともいえるだろう。

思い返せば、文学の世界からも私は多くのものを得てきた。人は肉体的に限りがあるので、行ける空間や時間にも限りがある。また、一人の人間の精神構造やものの見方は限定されている。文学作品の中では、空間や時間の選択肢ははるかに多い。新鮮な体験、そして言語の中に永遠化された、自分とは異質の洞察は、私たちが現実の中へ持ち帰れる宝物だと思う。



本は心の栄養素

保育科准教授
赤嶺優子

幼少期、仕事や家事で疲れていた母に、いつも寝る前に本を読んでもらったことを覚えています。

私が小学校の頃は本屋が近くになく、コトある度に学校で販売していました。夏が過ぎた頃、母に手をひかれ本の販売所へ行きました。母が、「好きな本を買ってあげるよ。」と言われた時、即、『うしわかまる』の本が目にとまり買ってもらいました。それから本が好きになり、小学生の頃、何度も何度も読み返しました。

そして、読み返す度、ちがう感動を覚え、私の心の栄養素となっていく感銘を覚えました。それだけではなく、本は、私の視野や学びも深め、モノの見方や考え、見聞を広げてくれました。私は、いまでも学生時代使用していた書籍を大切に持っています。在学時代に読んだ味わいと就職した際、また、近年目を通してみると、同じ書籍から学びの深まりをかみしめることができます。

本学には、いろいろな本が充実しています。本や図書館を身近なトモとして仲良くしては、いかがでしょう。



本を読まないあなたへ

英語コミュニケーション学科准教授
浜川 仁

「本」とは何だろう。大概は活字の印刷された紙の束ことだ。活字といえば、通常の書籍から、ビジネス文書や契約書などはもちろん、ブログやクーポン券、携帯メールや迷惑メールにいたるまで、この世の中、本の仲間で埋め尽くされている。友達から送られてくるメールを全く読まない人などいないし、誰もが特に興味のあるものにはひととおりを通す。

そう、私たちは膨大な文字情報にたよって生きている。読まないというのは、これら「本」の処理法のひとつなのである。いっさい読書をしない人でも、「読まない」という本との向き合い方を選んでいる。

さて、見ないからといって文書は消えて無くならないし、効力をなくしてしまうわけでもない。請求書の封筒を開けなかったとしても、「ツケ」はかならずまわってくる。文字情報は、あなたの生活にダイレクトに関わっているのである。自分の与り知らないところでものごとがどんどん変わり、思いもつかない仕方でチャンスを逃してしまうことに、あなたは果たしてどれだけ無関心でいられるだろうか。

むしろ、知りたいとは思わないか。



～学内～ 著作活動

(2009年4月～2010年3月)

■ 青野 和彦

1. 「ラス・カサス『布教論』の研究—第5章第7節における洗礼理解—」(『キリスト教史学』第63集 発表要旨)

2010年度発行論文

1. 「ラス・カサス“*De unico vocationis modo*”第5章の布教理念—第7節・第19節の洗礼理解を中心に—」
2. 「ペドロ・デ・コルドバの先住民観の考察—“*Doctrina Cristiana*”(1544年)を中心に—」

■ 内間 清晴

(共著論文)

1. '*Electrical resistivity and thermopower of Laves phase compounds of Nd_{1-x}Tb_xCo₂*'; *Journal of Physics Conference series (to be published)*
2. *Effect of pressure on thermopower and resistivity of EuCo₂P₂*; *Journal of Physics Conference series (to be published)*
3. *Effects of pressure and magnetic field on transport properties of Y_{1-x}R_xCo₂ alloys (R=Gd, Tb, Dy, Ho and Er)*; *Journal of Physics Conference series (to be published)*
4. *Thermopower measurement under high pressure Using "seesaw heating method"* *Journal of Physics Conference series (to be published)*

学会

「国際学会(共同発表)」

1. "*Electrical resistivity and thermopower of Laves phase compounds of Nd_{1-x}Tb_xCo₂*", *International Conference On Magnetism (2009.7) Karlsruhe, Germany*

他3回

「国内学会(共同発表)」

「*Nd_{1-x}Tb_xCo₂の磁性と熱電能*」, 日本物理学会2010年年次大会 (2010.3), 岡山大学.

他4回

■ 大山 伸子

1. 「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(7)—作品研究IV(昭和篇—③)—」
沖縄県立芸術大学紀要第18号、2010年3月発行

■ 本浜 秀彦

1. 「文学研究における『場所』と『ジェンダー』」『社会文学』(日本社会文学会) 第30号、2009年6月

2. 「手塚治虫とオキナワ」『春秋』(2009年6月号、7月号、10月号、11月号、12月号、2010年2月号、3月号)
3. 「溶けていく『語り手』の、『物語』への抵抗——ウイティ・イヒマエラ『ホエール・ライダー』再考」
『南半球評論』第25号(オーストラリア・ニュージーランド文学会) 2009年12月
4. 『マンガは越境する!』(共編著)(世界思想社) 2010年2月
5. 「マンガにおける場所と記憶——『SEX』にみる戦後の無意識と皮膚の欲望」前掲『マンガは越境する!』所収
6. 『島嶼沖縄の内発的発展——経済・社会・文化』(共編著)(藤原書店) 2010年3月
7. 「エキゾチシズムとしてのパインナップル——沖縄からの台湾表象、あるいはコロニアルな性的イメージをめぐって」前掲『島嶼沖縄の内発的発展』所収
8. 「オキナワン・コミックスの文化表象学」『沖縄学入門』勝方=稲福恵子ほか編(昭和堂)、2010年3月
9. 「人の移動とジェンダー——まとめ」『沖縄・ハワイ コンタクトゾーンとしての島嶼』石原昌英ほか編(彩流社) 2010年3月
10. 「『沖縄人』表象と役割語——語尾表現「さ」(「さぁ」)から考える——『役割・キャラクター・言語——シンポジウム・研究会発表会報告』金水敏編(科研費基盤研究(B)「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」、研究代表者・金水敏[大阪大学大学院文学研究科教授]) 2010年3月



“データベースを使えば本探しや情報探しがもっと楽しくなる”なんて言っちゃって…。データベースだって、雑誌記事、新聞記事、統計データ、法律・判例などいろいろな種類があるからどれを使ったらいいのかよく分からないと思っている方も多いのではないのでしょうか？

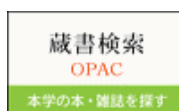
沖縄キリスト教学院図書館にはキリ学、キリ短の学生がレポート等を書く為の図書、論文 雑誌や新聞記事等を検索するためのデータベースが用意されています。

利用方法は、探している情報によって違ってきますが、大まかに次のようになっています。

1. 本・雑誌を探す

- OPAC
- NACSIS Webcat
- Webcat Plus

以上3点は[図書館カウンターPC]で利用可



- 日経BP記事検索サービス

[学内PC]→[図書館HP]経由でアクセス可



2. 論文、研究成果、分野別専門情報を探す

- CiNii (論文情報ナビゲータ) ※一部文献無料で取得可
- CSA (Cambridge Scientific Abstracts) ※文献の要約
検索分野: 芸術・人文科学、社会科学
- Academic Search Elite ※一部文献無料で取得可
検索分野: すべての研究分野
- Eric ※一部文献無料で取得可
検索分野: すべての研究分野

以上4点は[学内PC]→[図書館HP]経由でアクセス可

3. 新聞、雑誌記事を探す

- 朝日新聞記事データベース・聞蔵(キクゾウ)DNA
[学内PC]→[図書館HP]経由でアクセス可
- ELNET
- 琉球新報データベース
- 沖縄タイムスデータベース

以上3点は[図書館カウンターPC]で利用可

詳しくは、図書館職員へお問い合わせ下さい。



図書館ニュース

休刊・中止(和雑誌)

- ▽ 月刊「こども未来」 2010年3月号で休刊 こども未来財団
- ▽ The professional translator=プロフェッショナル トランスレーター 月刊
改題: The legal. comm=リーガルコム、翻訳の世界
2009年4月号で休刊 バブルプレス社
- ▽ 日経パソコン 隔月刊 日経BP社
- ▽ 週刊エコノミスト 週刊 毎日新聞社
- ▽ 週刊東洋経済 週刊 東洋経済新報社
- ▽ AERA 週刊 朝日新聞社

2010年度新規購入受入和雑誌

- ▽ 百万人の福音 月刊 いのちのことば社
- ▽ 法学教室 月刊 有斐閣

2009年度『論集』・『紀要』発行！！

2009年度『沖縄キリスト教学院 論集』第6号
— 仲地弘善 教授 退任記念号 — 発行

2009年度『沖縄キリスト教短期大学 紀要』第38号発行



沖縄キリスト教学院 創立50周年記念誌 発行！！

2007年4月9日で創立50周年をむかえた本学院がこの度、記念誌を発行した。記念式典(2008年6月14日開催)の写真の他、歴代学長・理事長・卒業生・後援会長・同窓会長・学内関係者多数の方々が執筆されている。表紙デザインは、西村貞雄 元本短期大学 保育科教授によるもので、首里教会の鐘桜から撮影された首里キャンパスと新築移転した現、西原キャンパスを結びつけた50年の歴史が伺えるデザインである。記念誌表裏にはコンセプトが掲載されている。



各学科代表図書館委員紹介(任期:2009年4月1日~2011年3月31日)

作田 真由子(英語科教授)

赤嶺 優子 (保育科准教授)

浜川 仁 (人文学部准教授)